

fashion

キレ物

すご技

一段限りの引き出しに脚を付け、現代家屋の玄関先にも置けるデザインに。従来は竜や唐獅子といった縁起物を描く金具は、モダンな幾何学模様。着物のほか、伊達者の侍は刀を収めたという重厚な仙台簞笥が、スマートな姿に生まれ変わった。

手がけたのは創業明治5年の門間簞笥店(仙台市若林区)。生活様式が変わって簞笥作りが危機に直面する中、7代目の門間一泰さん(36)が「このままでは文化も会社も残っていけない」と考えた。

140年の技能 スマートに飾る

仙台簞笥 仙台

ロンドンで活躍する家具デザイナーの安積朋子さん、現



「武士の簞笥」が、女性の感性でコンソール(飾り机)になった」と話す門間一泰さん

代的な着物柄作りで知られるアーティストの高橋理子さんに協力を仰ぎ、「monmay+」として誕生した新製品だ。

「ぐるい」を起こさないように10年以上寝かせた宮城の檜を前板に、内には秋田の桐を使う。上質な浄法寺漆で、塗りや磨きを30工程も繰り返す。8人の熟練した職人がいるからこそできる物作りだ。

東京でリクルート社に10年勤め、父の急死で昨年Uターンした門間さんは、「140年の歴史の中で培われた技能が

あるからこそ、ほかでは絶対にまねができないことができる。格安の家具が広がる中、伝統にデザインをプラスして勝負したい」と話す。

1月から注文を受ける「monmay+」も予価55万円からと高価だが、「「棹養生」と呼ばれる修繕で、孫の代にも受け継いでいける。東日本大震災の後には、津波で傷んだ古い簞笥が次々に運び込まれた。家族の思い出も再生し、届けている。

新製品は、高さ約75センチと55センチの2種。金具の色は黒と銀、塗りも明るめの拭き漆と地域独自の木地呂から選ぶことができる。(中島耕太郎)